

大学山岳部の低迷が続く。廃部、休部、長期山行ができなくなつた、フリー志向が強くなりアルパインへの関心が薄れた、など。一方で部員増加、活動上向きの大学もある。今回は各部へのアンケートを元に、山岳部の現状について解説してもらつた。

大学山岳部が大勢の部員を擁し先鋭的な社会人山岳会に伍して記録に残る登攀や探検的な厳冬期の山行を行ない、はたまた勇躍海外で活躍していた時代は、もはや伝説的な霞の彼方へ飛び去つたように思われます。

私は1980年代に大学山岳部の現役だった年代です。そのころは多くの大学で部員数は20~30人を数え(もう少し前の方があれは多かったのですが)、合宿や個人山行が盛んに行なわれていました。

今から三十余年ですが、80年というのは、エヴェレストの初登頂から27年、日本人の初登頂からすればやつと10年が経つたばかりの時代であつたわけです。

世の中は、高度成長を遂げ、国民みんなが中流意識を持つようになつて、たくさんの人が海外旅行へも行くようになりました。一方、あらゆる分野での工業技術の革新もめざましく、ゴアテックスが登山用品として世に出て来たのも、ちょうど80年ごろでした。

「古きよき時代は過ぎた」とは人間史上連綿と語り継がれてきた言葉ですが、日本の登山界にとつて、特に大学山岳部にとってこの時代は本当に恵まれた時代ではなかつたかと思ひ返されます。

翻つて、最近の大学事情は、世の中の事情はどうなつてゐるのでしょうか。



写真提供:信州大学山岳会

結局、1年のうち2~3回しか長丁場の登山はできないのが実情です。これは部員が少ないからとか、そのため知識・技術・経験の伝承がうまくいかないとかいう理由とは別の問題として、現在の山岳部において大きな問題となつています(学業優先を前提にすれば問題というの本末転倒なのですが)。

そして、老舗と言われる大学山

大学山岳部のいま

YOUTH CLUB 学生部部長 中山茂樹

大学山岳部の低迷が続く。廃部、休部、長期山行ができなくなつた、フリー志向が強くなりアルパインへの関心が薄れた、など。一方で部員増加、活動上向きの大学もある。今回は各部へのアンケートを元に、山岳部の現状について解説してもらつた。

大学山岳部が大勢の部員を擁し先鋭的な社会人山岳会に伍して記録に残る登攀や探検的な厳冬期の山行を行ない、はたまた勇躍海外で活躍していた時代は、もはや伝説的な霞の彼方へ飛び去つたよう



2014年(平成26年)

5月号(No.828)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

大学山岳部のいま	1
「南極・サポートタイプ・山の形」の3講演に聴き入る	7
「山の日」を意義ある日に未来を生む	
JACの今後の活動「山の日」制定プロジェクト	8
どこへ行く『岳人』モンベルに商標権譲渡	9
支部だより	10
北海道支部/東京多摩支部/北九州支部	
図書紹介	12
Climbing&Medicine	62
会務報告	15
ルーム日誌	16
会員異動	16
図書受入報告	16
新入会員	17
INFORMATION	18
日本山岳会所蔵資料紹介 No.11	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間	
月・火・木	10~20時
水・金	13~20時
第2、第4土曜日	閉室
第1、第3、第5土曜日	10~18時

岳部においても問題となつてゐるのが部員数の激減です。ご存じのとおり多くの大学で実動部員がいなくなり廃部となつていていますから、存続しているだけで立派な山岳部であるとさえ言えるのが現状です。部員数が少ない上に年間に山に入ることのできる日数も以前に比べて大幅に少なくなり、山岳部としての実力の維持がきわめて難しくなつてゐることは容易に想像できます。加えて、たとえば2年生と1年生しかいないう年などに当たると、基礎練習さえ満足にできないう状態となり、卒業生の献身的な尽力をもつしても、先述べましたように知識・技術・経験の伝承はおぼつかなくなつて一気に実力を低下を招きます。

世の中はといいますと、一つだけ最近の新聞記事から引用してご紹介します。

「首都圏を中心とする私立大に2013年度に入学した下宿生への仕送り月額(六月以降の平均)は13年連続で減少して8万9,000円となり、1986年度の集計開始以降で過去最低を更新したことが、東京地区私立大学教職員組合連合(東京私大教連)の調査で分かつた。

(東京新聞四月六日朝刊)
ちなみに最高額は94年の12万4,900円だそうです。

お家の人たちも学生本人も、山を楽しむ環境としては年々厳しくなつてきてゐると言えるでしょう。「昔」の登山事情に話を戻しますと、地元の獵師をガイドに雇つて山に分け入つた戦前までの時代はさておき、高度成長に乗つた時代は活発な学生の時代とも重なり、人数を恃んでという面もあつたでしあが、またそれ故に皆が切磋琢磨し、授業など心配の外に年間100日以上山に入つて実力をつけて経験を積んでいったのでした。海外に目を向けてみると、53年から64年の間に80,000m峰14座は初登頂がなされました。そして、一般市民が自由に観光旅行で海外に行けるようになつたのが1964年でした。それからつい先日まで7000m以上の未踏峰が残されており、多くの大学山岳部が登山隊を組織して、海外登山へ出かけ多くの成果を上げてきたわけです。

言つてみれば、一生懸命山を登つていれば楽しい山登りはごろごろ転がつていて、達成感や充実感をひしひしと実感できる山登りがある。しかし、そのような山登りが

国内外で実現できた時代だつたのではないでしようか。

ところが今はどうかという、一生懸命(主に「たくさん」という意味で)登りたくても授業に出なければなりません。人が登つていません。人が登つていません。ワクワクする山を捜すにしても高い山は残されていません。ワクワクする山登りはいつたいどんな形で実現できるのだろうかと悩んでしまいますが、まだそれ故に皆が切磋琢磨し、授業など心配の外に年間100日以上山に入つて実力をつけて経験を積んでいったのでした。海外に目を向けてみると、53年から64年の間に80,000m峰14座は初登頂がなされました。そして、一般市民が自由に観光旅行で海外に行けるようになつたのが1964年でした。それからつい先日まで7000m以上の未踏峰が残されており、多くの大学山岳部が登山隊を組織して、海外登山へ出かけ多くの成果を上げてきたわけです。

いろいろな面から見て、今の大學生山岳部は本当にやるせない状況にあります。

さて、そんな大学山岳部に対し

最も重要な話題であり課題です。単独で基礎練習ができない大学山岳部が今ではたくさんあります。「昔」の日本山岳会学生部は海外登山に意欲を示す学生たちの集まるところでしたが、今や自分たちだけで合宿や山行を組めない大学山岳部が数多く参加して学生部を構成しています。

この点で以前にも増して学生部は重要な役割を担つており、むしろ彼らにとつてはなくてはならない位置付けとなつていると言えます。我々はロープワークや雪上訓練などを、複数の大学の学生と共に日本山岳会YOUTH CLUBの主催で行なっています。

同時にYOUTH CLUBでは40歳未満の社会人を対象に雪山入門教室を開催しており、雪山登山の最初から指導していますが、これらの講習生や青年部メンバーと山岳部学生との合同講習も行なっています。そのような場では、それぞれの立場でお互いに刺激を受けて良い講習になつています。

多くの大学山岳部を対象に、まずは基礎をしつかり押さえること徹底して指導したいと考えており、我々日本山岳会こそがそれ

応えられる仕組みを備えた組織で
あると自負しています。

たとえば、箱根駅伝では学連選抜チームが出場するようになつてきました。衰退の一途をたどる山岳部の現状を見るにつけ、大学選抜チームの育成が当会の学生部の役割であると強く感じています。

卷之三

一方、社会人山岳会も低迷して久しいと言わざるを得ません。後

継者不足、高齢化のため山岳界において指導的な役割を果たせなくなっています。当会ではYOUTHが初心者指導の役割

HCLUEが初心者指導の役割を担っていますけれども、一般には社会人山岳会を教育機関の機能を備えた場とは言い難くなっています。そういう環境の中で、学生のうちに基礎的な知識・技術・経験を習得していることは大きなアドバンテージであり、強いバックボーンとなります。卒業後も、この経験は社会で活躍するための強力な武器になります。

後も社会人としてリーダーシップの取れる登山家へと成長していくことが期待されますし、またそ

であつて欲しいと願っています。
以前の学生部では、学生それぞれの意識は各自の大学山岳部への帰属意識の方が強く、卒業しても日本山岳会へ入会することに躊躇する人が多く、若年層の会員が増えない原因の一つでした。ところが最近のYOUTH CLUBの取り組みに参加してくれている学生は、すでに日本山岳会に個人会員として加入している学生も多く、（山行を組む上で所属大学に対し責任を明確にするため必要になります）、日本山岳会に対する懼怖意識をしつかり持つてくれていることも当会としてまことに喜ばしいことです。これまでどおり山岳部として団体加入している大学山岳部においても、当会に対する親密度は増していると感じています。

当会ならではの全国規模の学生への、そして若年層への講習を展開していきたいと考えています。

最後になりましたが、大学山岳部に対しアンケートを実施しました。50校に連絡をとり21校から回答を得ました。ご協力下さった大学山岳部にお礼を申し上げます。内容の取りまとめはこの続きを掲載しますが、特筆すべきことを一つに披露させていただきます。

信州大学からの回答にあった全国の大学山岳部へ向けたメッセージです。大学山岳部もまだまだ捨てたものではないぞと、我々の活動にも力が入ります。

なお、以下は、信州大学山岳会（山岳部）からのお知らせ、提案です

*信州大学松本キャンパスの山岳会部室を大学山岳部の松本拠点として一部開放します。前夜泊荷物のデボなど、自由に使つて下さいい。大学山岳部の有意義な情報交換の場となることを願っています。将来はここで大学生の海外遠征隊が組まれたりして……なんないことでも、楽しく想像しています。

詳しく述べは信大山岳会 荒川武大まで。

wild-rivers-address@softbank.ne.jp

〈P6からの続き〉

- 登山の最大の魅力は普段見ることのできない美しい景色をたくさん見られることだと思うので、仲間たちと楽しく、きれいな景色を眺めながら気楽に登山。
 - それぞれの個性を活かし、そのメンバーでしかできなかったと思えるような山行。
 - 思い出に残るもの。
 - 自分が楽しく、一緒に登る人も楽しませるような登山。
 - ビッグウォール。
 - より高いレベルの冬山に挑みたい。厳冬期の剣岳など。
 - 安全性を最大限配慮。
 - 100%の献身
 - 自然と対話しながら、自分の限界を感じられる登山。
 - 事故は絶対に起こさないと考えているので、無理無茶はしない安全な登山を心がけたい。
 - 安全に配慮しながら部員全員が楽しむことができる登山。
 - 既存の発想にとらわれない、自由な形の山行。自らの持てる肉体的・精神的能力を最大限発揮できる山行。好奇心を満足させられる、未知の領域における活動。
 - 気心知れた仲間と自分たちのレベルに見合った、欲張らない中でも新しいことに挑戦できるような登山。
 - グレードの高い冬期登攀。
 - 登りがいのある楽しい登山。
 - 安全に楽しく、これに尽きる。
 - 生涯続けていける登山。
 - まだ明確なものは見えていない。とりあえずいろいろなことに挑戦している段階。
 - 自分の体力、技術に見合った登山(登攀・縦走どちらも)。
 - 技術と知識の裏付けがついたスタンダードを身に付けた上で、それを応用させた上の挑戦的な登山。未知への挑戦。

今回、巻頭記事を書いてもらうにあたり、大学山岳部・ワンダーフォーゲル部、合計50校の部にアンケートを依頼した。そのうちの21校の部から返信があった(ワンダーフォーゲル部からの返信は、国際基督教大学1校のみ)。
以下、その概要をまとめたものである。

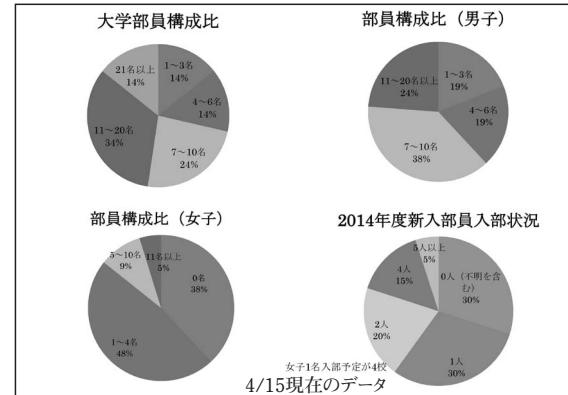
- 岩登りに挑戦。
- ピッチグレード10a以上が含まれるマルチピッチルートの登攀・エイドクライミングの習得(トラッドルートの経験)・積雪期爺ヶ岳、鹿島槍。
- 2015年のカンジガルボ遠征に向けての偵察隊派遣、本隊派遣準備。挑戦的な登山。自分より上の世代が積極的に山をやらず強くもなかったので、1回生のころはあまり経験を積めず、2回生からいきなり後輩の指導をしなければいけなくなったので、なかなかレベルの高いことができなかつた。部・個人の発展のためにも、今年は挑戦的な登山を試みる。
- 創部50周年記念の現役部員、OB・OG合同カナディアン・ロッキーへの遠征。
- 穂高を中心に北アルプス・南アルプスのバリエーションルート。合宿の成功。他大学と交流を持ち、盛んに情報交換。アイスクライミング、沢登り、山スキー技術を会全体に普及する。
- 夏山を中心とした山行計画を立てている。しっかりと部則に沿って、安全な活動をする。剣岳定着合宿、縦走を同時に実行など。
- 計画をすべて無事故で完遂する。
- 瑞牆山十一面岩、錫杖岳のクライミング。
- 春山決算合宿で剣岳・早月尾根からの登頂。
- 富士山山行を大学の一般学生向けに実施を予定。

入部の主な動機

- アイデンティティを失いたくなかったから。周りの期待に応えたかったから。
- 新歓で誘われて興味を持ったから。
- もともと登山に興味があり、中学生のときに少しの間所属していたワンダーフォーゲル部の活動に物足りなさを感じていたため。
- 本格的な登山がしたかったから。
- 個人では実現できない高度な登山が経験できると考えたから。
- 高校時代に山岳部に入っていたから。(高校になかった)新しいことを始めたい。もともと野外活動、登山に興味があった。
- 先輩に勧誘されなんとなく。
- 登山経験が多少あったのと、先に友人が入部していたから。
- 部活がやりたかった。
- 特にこれといった動機はなし。運動神経が悪い自分でもできる部活はなかなかと思っていたところで、ふと目についたから。
- 中学校・高校が山岳部だったため。
- 新しいことをやってみたかった。
- 打ち込めるもののが欲しかったから。大学から始めて遅くなさそうだと思った。
- 父親が山岳部出身だった。スキーカー山かで迷い、大学生活でしかできない山をやることになった。
- 高校時代に山岳部に入っていて、山登りがそれなりに好きだった。大学でほかに面白そうな部活がなかったから。
- 山に登りたかったから。
- 高校時代に山岳部に所属していたため。
- 体育会系の部会で、初心者から始めて活躍できるスポーツだと思ったから。
- 山野井泰史さんの著書を読み、このようなクライミングがしたいと思ったから。
- 大学に入って何か新しいことに挑戦してみたいと思ったから。
- 友人からの勧誘。

入部後、想像と違った点

- テントが家形テント。
- 想像以上に危険が多い。
- あまり楽しいものではないし、華がない。
- 部活動が学業や生活に支障をきたすと思っていたが、配慮してくれる環境にあった。
- 山岳部員は皆たましい体格の人ばかりと思っていたが、そうではなかった。登山するために資料検索、討論、勉強会が必要。
- 高校生活と比べ、大学生活は様々な点で自由で活動が合わない。通学時間や住んでいる地域によって行き先が合わせにくい。スケジュールが組みにくいくらい。
- 整備されているルートは3000m越えの山でも簡単に登れる。
- 思ったより女子が多かった。
- 体力があればどうにでもなると思っていたが、実際には気象や読図など頭を使うことも非常に重要。
- 非常に不人気な部活で、部員数が少ない。想像以上に疲れる。お金がかかる。
- 事故というのは、多くのミスを重ねた本人の責任であることが多い。
- 世間一般に、意外と登山技術は確立されていない。理論の裏付けのない「技術」が多い。上下関係が厳しくない。先輩後輩同士でも気さくに接することができる。
- 高校の山岳部は男子部員が多く、毎日練習があり体力的・精神的に辛いこともあったが、大学のワンダーフォーゲル部は女子の数も多く、山



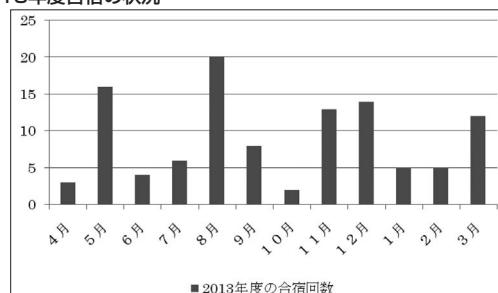
日常の部活動の内容

- 週1~2回のミーティング・トレーニングを全体の72%が実施
- ▷ 平日は最低週4コマで各自自主練習
- ▷ トレーニングなどはなし、月1~2回部会
- ▷ 合宿直前は7日間準備期間で、気象、ファーストエイド、地形、ロープワークなどについて学ぶ

新入部員の勧誘方法

- ピラ配り・ポスター掲示
- ブース設置・説明会
- クライミング体験・ハイキング
- HP・Facebook・blogなど
- ▷ 所有するヒュッテでの宿泊。
- ▷ 学生センターに動画広告の掲載。
- ▷ 積極的に声がけ、新歓イベントに無理に誘うなどの体育会によく見られるような勧誘はしていない。チラシはきれいな写真を多用したカラー印刷を用いる。写真で「だます」のが戦略。
- ▷ 冬山フル装備でピラ配り。目立ってナンボ。
- ▷ 監督の講演会・写真展。
- ▷ 友人関係のネットワークを利用。

2013年度合宿の状況



行先は高尾山から剣岳まで、内容はハイキング、縦走、登攀など。

2014年度の目標

- 海外遠征の成功。
- 2014年夏、インドヒマラヤ・ザンスカル地方への海外遠征、6000mの未踏峰の初登頂。
- 今以上の新入部員の勧説。
- 安全第一で怪我や事故のないようにする。部員一人一人が登山家として自立した人間になれるように日々、練習を行なう。
- 夏のネパール・エベレスト街道トレッキング、冬のパタゴニア。
- 夏の白馬岳の登山、クライミング活動の普及・充実と個人のグレードを上げる。
- 白馬岳主稜、山スキー・沢など活動の幅を広げたい。
- 地方の山。
- 年々部員が増加しており個人のばらつきが生じているので、能力の底上げ。ただ、がんじがらめになって登山を楽しめなくなってしまいかねないので、そのバランスが難しいところ。
- 部員数増強。

- 改善するにはどうしたらよいか、どんなことをしているか**
- 4Kこそが登山というスポーツであると考えているため、改善は不可能。そういう特徴を受け入れる覚悟がある人を養成する。
 - アルパイン・スタイルのように、スマートな形式もあることを広め、魅力を伝えること。
 - OBなど経験のある先輩諸氏に引率をお願いする。OBからのある程度の寄付で、新入生の装備代として貸し付けている。公共機関の情報提供の活用。
 - 今年の新歓は、コミュニケーション能力の低さをそれ以外の部分(ピラのカラー化、立て看板の増設、企画の充実、元部員の女子を連れてくる、などを)を強化することによって補う方針で行なっている。
 - 市街地で手軽に楽しめるインドアのクライミングから始めてもらう。個人があまり無理をしないように練習やマーティングのスケジュールを組む。
 - なるべく合宿以外は、楽しい山行をしている。
 - 登山の楽しさを伝え、部で貸出用の備品を持っておく。
 - 命の危険もあるのは事実なので、下手に気楽なものであるという印象付けをするのは良くない。辛いからこそ得られる達成感など、登山にしかない魅力をアピールしていく必要。
 - 部費で装備購入の補助などを行なっているが、大きな効果はない。長期スパンでテレビなどの目に触れやすいメディアを活用して、若い人々の山に対する意識を根底から変えていかない限り、大学山岳部が滅亡する日は近い。
 - 大学山岳部に対する正しい情報の提供。新歓期には説明会などを開いて積極的に情報提供。
 - 活動写真や道具の展示(活動を知らせる広報活動)、学割やセール、アウトレットの積極的利用。
 - 積極的にSNSを使って発信。
 - 私たちの部活の良いところは、少人数で気楽に好きな山に登っていることなので、新入生勧誘の際には、自分たちのペースで無理せず登山をしていることを伝えている。ザックや雨具など、個人のものを持っていたい部員に部の装備を貸している。
 - 広く自分たちの活動を知らせる。ブログ、動画などネットを通して知つてもらえるようにしている。
 - フレンドリーな雰囲気が大事。
 - 基本的には無理だと思うので、山岳部の活動に興味を示す人にはできるだけ魅力を伝えるが、強引な勧誘はしない。
 - 一度でも事故をしないように入念な準備と計画作り、トレーニングなど安全第一に部活動の運営。
 - 広報用のチラシの配布。

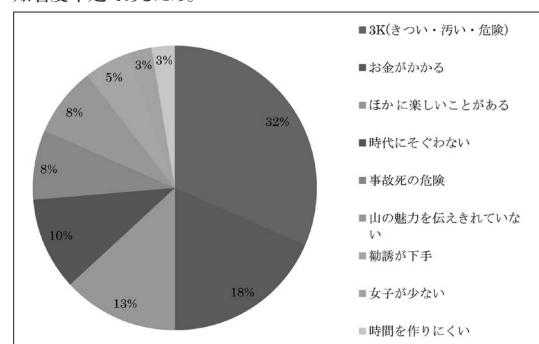
- OB会、監督・コーチに期待すること**
- 遭難救助の対策、体制
 - 現役に自由な発想の登山をさせること。資金面の援助。
 - 現状で満足。
 - 現役が盛んに活動するためのバックアップをして欲しい。モチベーションを上げるという意味でもOB会、監督・コーチの指摘などに期待している。また、刺激を受け計画に踏み切ったときのサポートとして、バックにいてくれることで安心感が得られると思っている。
 - 部員の必要に応じて、部活動運営を考えるにあたってのヒントを示して欲しい。登山全般の知識、海外遠征のノウハウを教授して欲しい。
 - 活動への参加、技術指導。その後の就職、進路相談など。
 - 現役部員への手厚いサポート。
 - 支援や指導。
 - 飯おごってほしい。
 - OBとは何ですか一緒に山行に行っていて、状況判断など経験が物を言う場面での適切な判断の基準、根拠を学んでいる。今後もそういう面で協力して欲しい。
 - 技術指導や装備提供、事故発生時の救助活動。
 - 適切な指導。
 - 技術面での指導(生活技術、歩行・登攀技術など)、金銭的援助(使わなくなった道具の寄付、支援金など)。
 - 日々登山技術は新しくなるのだから、過去の「常識」にとらわれた指摘は控えて欲しい。金銭的援助が欲しい。若手OBの現役活動への積極的参加が欲しい。当山岳部は顧問の教授はいるが、技術的なアドバイスは受けられない。その代り、笠倉ガバに技術面などの指導をいただいている。比較的活動はしやすい状況にある。
 - ここ5年間ほど大学から部費が全くもらえていないので、現役部員に向けての寄付をして欲しい。
 - 面と向かって、できれば一緒に山に入っての技術、経験の伝授。単純にOBの話を聞きたい。もっともOBは「金は出ますが口は出さない」というスタンスらしい。
 - 過去の遠征の経験などを教えてくれるとありがたい。
 - 技術、資金の援助など。単独行でも背中を押してくれる監督は欠かせない存在。
 - 学生がより高いレベルの登山をするまでのOBからの指導など。

で行動中も各自の体力に合わせたペースで歩くので、高校時代よりも楽しく気楽に登山ができる。

- 思ったほどOBと交流がなかった。なんとなく入ったが思った以上に歴史のある団体だった。
- 書類作成などに追われる。体力だけあればいいのではなく、頭を使う部分の方が大事だった。
- 自分よりも情熱の持った部員に出会えると思っていたが、実質の部員は自分だけ。
- 体力だけでなく、技術や知識が登山をする上で重要。
- OBとの協力が密である。

なぜ大学山岳部に人気がないか

- 4K(悪い、汚い、きつい、危険)
- 重い荷物、長時間の理不尽な行動などのイメージが、今の大学生にフィットしていない。
- 練習が厳しそうなイメージ。装備など大学生にとってお金が必要そうであるというイメージ。危険であるというイメージ。
- 我が部は比較的部員が多く、実感としてはそれほど人気がないとは感じていない。
- 対人コミュニケーションが苦手な部員が多く、新入生勧説が下手で、山岳部の魅力を伝えきれていないから。
- バイトやサークルなど大学生活の華やかな面とある意味対極にあるから。1泊2日以上のまとまった時間を作りにくい。登山よりも旅行や留学に行ってしまうから。
- いわゆるKなど印象が悪い。またほかに楽しいことがあふれているので、そっちに流れやすいのだと思う。
- 登山という行為がదるい、お金がかかるなど。
- 時代の流れ。
- 体力的にキツイ、女子が少ない、など気軽には始められないものという印象が強い。
- 現在では、厳しい練習を課す部活は大学生の生活スタイルに見合わない。厳しい練習を課してもそれに見合う結果が得られない(大会優勝や表彰など)。近年の登山ブームで北アルプスの観光化など、部活動に入らなくても十分な登山欲求は簡単に満たしてしまう。かつて大学に進学できる人は多少なりとも裕福であった。それに対して大学全入時代では、大学の学費で精いっぱいな学生が多いため、金額的負担が大きい登山は人気がないと思われる。
- 危険な印象が強い。そのほかに魅力的で比較的手軽に楽しめるサークルが多数ある。体育会系は厳しいという固定概念。
- 部活動自体が敬遠されている。お金がかかる。魅力を知る手段が少ない。
- 山の魅力を伝えきれていない。自分たちで楽しむことにはばかり目がいってしまい、外部に魅力を発信する努力を怠っている。大学生は男女仲良ぐ樂に楽しめる活動に傾倒する。また、命を危険に晒し、体力的にも精神的にもしんどいため。
- やはり登山=辛いというイメージが大きい。登山は中高年がやるもので、若い人には向いていないというイメージ。登山装備は一通り揃えるまでの費用が高いので、大学生には金銭的に辛い。
- 冬山=死というイメージがどうもぬぐえない。特に親の世代にそれが強く根付いているように感じる。大学生という身分で山に行くには多少なりとも親の援助、協力が必要となるので、唯一のスポンサーともいえる親が、山岳部にネガティブなイメージを抱いていることが人気のない理由の一つ。
- 時代遅れ、きつい、つらい、事故死などのイメージ。
- 現代の大学生は、基本的には大学に勉強か、遊びに来ているか、スポーツ推薦で来ているかのどれかだと思う。だから、大学から始める人が多いマイナーなスポーツである山岳部の活動は、勉強に集中したい人や、遊びたい人にとって、あまり興味をそぞれるような魅力的なものではない。一般的には、きつい、危ない、汚い、泥臭い、金がかかる、などのイメージがある。
- 本格的に山がやりたい人の絶対数が少ない。
- 危険だというイメージ。
- 知名度不足であるため。



- アルパイン・クライマーを目指す場所。
- 練習が厳しいなかでも、雰囲気良くやっていきたい。
- 同志社大学山岳部は歴史が長く、活動的な山岳部として継続してきたので、今後はより活動範囲を広げたい。そして将来、今の現役が歴史的に見て偉大であったと言われるくらいになることができれば幸いである。
- 伝統、慣習にとらわれない、現役部員が正しいと考えるやり方を現役部員が貫徹できる体制にしたい。
- 非常に個人的な意見だが、一人一人が登山またはクライミングに関係する活動をする。一人でできないような活動の際に部員同士で助け合なことができるような関係を築く。
- 大人数で多角的な活動ができる部。
- 部長など幹部が登山を企画するのではなくて、部員が自分たちで自由に企画するような部。
- 卒業後も登山を続けたいと思えるような楽しい思い出が作れる部活にしたい。もちろん技術や知識の習得、後輩への継承も大切にしたい。
- かつてのような、無駄に重い荷物を持たせたり、意味もなく走らせたりなど無理したり厳しくする山行はせず、様々な分野の基礎技術保持に努め、部員が好むものを主に行なう山岳部にしたい。
- まだ部として認可されていないので、まずは部として承認されることが目標。
- それぞれが挑戦したいと思うことを実現するために、お互いに助け合える部にしていきたい。
- さすがに大学山岳部出身と言われるような強い登山者をつくる。しっかりと生活技術を身につけ、過酷な状況でも死なずにしっかり行程を消化でき、場合に応じて適切な判断ができる登山者をつくる。
- 小規模の部活のままで良いので、部員同士和気あいあいとした部活にしていきたい。大学から登山を始めた人もそうでない人も、一緒に楽しく山に登れるようにしたい。
- 現役の意見がOBに尊重され、技術指導や飲み会を通してOBと良好な関係を保ち、他大学と広く交流し情報交換を行ない、大学同士でお互いに高め合っていけるような形。
- 協力し合う集団。
- 先輩方から受け継いできたものを伝承しつつ、悪い部分は変え、新しいことも取り入れながら、今までどおりやっていきたい。
- とにかく部員が欲しい。
- 今後も事故がないようにしっかりと土台を作り、次の代に引き継いでいきたい。
- まずは部員不足を解消。その後、さらなる用具の充実を図り、山行を充実させていきたい。

一番心に残った、充実した登山

- 3月に早見尾根のACにて、1日停滯した次の日の頂上アタック時の風景。
- 去年の夏にヨーロッパ・アルプスに他大学の山岳部の部員と遠征を行ない、マッターホルン、モンテローザ登山。
- 8月下旬、ハッ峰Aフェース。
- 2012年11月ごろ、乗鞍岳(四ッ岳)。
- 3月下旬、床平島縦走(羅臼峰から岬まで)。
- 2010年7月下旬(当時高校2年生)、新穂高温泉から槍ヶ岳、槍沢、上高地に縦走(4泊5日)。
- 夏に初めて登った3000m級の山だった白馬岳。
- 1年の夏の赤岳登山。
- 旭岳東稜。
- 1年生で初めての長期合宿だった北アルプスの縦走。
- 夏合宿の大雪山・黒岳～トムラウシ山。
- 9月7～8日、八ヶ岳(権現岳～赤岳)。
- 夏の前穂北尾根。
- 前穂北尾根・滝谷ドーム中央稜攀攀、穂高連峰縦走。
- 大学1年生の夏休み、上高地～室堂まで1週間かけて北アルプス縦走。
- 3月1～4日 鹿島槍東尾根。
- 2012年5月、白馬岳・大雪渓など。
- 2013年3月5日～3月10日、奥秩父縦走(雁峰～増富温泉)。
- 夏の登山研のとき、残置無視で登った別山岩場。
- 初めて北アルプス・剣岳を見たとき
- 回目平での山行。

憧れるクライマー、登山家

横山勝丘、山野井泰史、遠藤二郎、小西政継、加藤保男、平山ユージ、花谷泰広、馬目弘仁、南博人、野口健、ギリギリボーズの方々、ウェリ・シュテック、クリス・シャーマ、ライホルト・メスナー、ダグ・スコット、スティーブ・ハウス、ジョージ・マロー、道を拓いた先達、OBである未踏峰の登頂経験のある方、山岳部OBの方々

*国内外それぞれ、型の多かった順に記載。

どんな登山をしていきたいか

- ねちねちとして泥臭い登山。

〈P.3下段に続く〉

- 山行への協力。

- 大学山岳部に入つてよかつた点
- コネができた。
- いろんな人から応援される。
- より我慢強くなれた。
- 向上心の高い大学生・先輩たちと出会えた。高いレベルの活動が現在できている。
- 自らの登山の視野が広がった。歴代のOBから直接、海外遠征の話を聞くことができる。
- 違う学科の学生やOBとコミュニケーションをとることができる。今まで知らなかった世界を見た。
- 登山の楽しさが分かった。
- 日常では得られない感動を得られている。普段の生活にも活気が出るし、山行はとてもいい運動になる。山行を充実させるためにトレーニングも行なっているのでより健康的な毎日を送っている。
- OBをはじめとして日本山岳会関係など、人々とのつながりができた。
- 本当に危険な状況とはどんな状況かを正しく判断することができるようにになった。楽しい。
- なんとなく大学生活を送っていただけでは見ることのできない景色を見ることができる。
- 長期の山行は今しかできないし、体力が必要となる山行も積極的にできる。山の「常識」を基礎からみっちり教わる。過去の「常識」にとらわれず、理論に基づいた登山ができる。
- 平日は授業が忙しいが、土日に山に行くことでとてもよい気分転換になる点。自分たちのベースで楽しく登山ができ、山行を通じて部員の仲が深まる。
- ほかのサークルでは得られないような充実感を得られる。不確定要素の多い中、計画を遂行するマネジメント能力、自然の変化に敏感になるサバイバル能力、打たれ強くなる精神力が身に着いた。
- たくましい精神力が身についた。
- 大学山岳部で主将をやっていると、下界では、オフィスの中の中間管理職のような仕事、山では、現場でのリーダーとして仕事をする、様々な社会経験ができる。
- 資金の援助がありたい。
- いろいろな山に行けた。冬山に行けた。
- 多くのOBとの交流ができる。

山岳部員を継続していくことが辛い、辞めたいと思うとき

- 考えたことがない。
- 部内の入間関係など。
- 歩荷をするたびに感じているが、最近はマヒしている。
- 入部当初は覚えることが多い、自分にできないことが多かったときは、向いていないのかと考えることがあって辛いと思ったことがあった。
- 辛い：資料収集、読み込みなど、山行検討の準備が忙いとき。有効なのかどうか不明な、不合理だと思われるトレーニングをしなければならないとき。部員数が少ないために、仕事や責任が重く一人一人にのしかかり、要領よくやらないと学業、アルバイトなどほかの活動と両立が難しいという状態が顕在化するとき。部員数が少ないために、山行が組みづらく、上回生不足により組んでもレベルが低しがちで充実感を得にくいとき。辞めたい：部員に不信感を感じるとき。仕事や責任に耐え切れないと。目標が見出せない、または喪失したとき。
- 部員が卒業、退部などで減少したとき。山行で問題が起きたとき。人数が少ないので部員同士で問題が起きたとき。
- 行動時間が8時間を超えたときくらいに疲労がピークになったとき。
- ほかの部員がなかなか登山に参加してくれないと。
- 下界でのごたごた。
- 朝早いのはやはり辛い。山に入ってしまえばどうということはないが、日帰り山行などでベッドを出るのが大変。辞めたいと思ったことはない。
- 土日はほとんど部活なので、友人と遊んだりできないとき。先が見えないと。想像以上にお金がかかることが判明したとき。
- 周りの部員のモチベーションの低さで、自分のやりたい山ができないとき(そのため、私は社会人と登りに行くことが多い)。
- 授業が忙しく、週末も課題をやらなければならず山行に参加できないときや、山行に向けて計画書や地図など色々と準備しなければならず、たまに面倒くさくなってしまう。私たちの部活は時間がある人が山に行くという形なので、辞めたいと思ったことはない。
- 自分の甘さを思い知るとき。
- 書類の作成、新人勧説関係の仕事、事務的な仕事が面倒くさくて辛いことがある。
- 入部してからずっと実質の部員が自分だけという状態であり、すべてを自分でやらないといけないのが辛い。また他大学の同期ができている経験を体験できないのが悔しい。辞めたいと思ったことはない。
- 辛いことは多いが、辞めるという選択肢は考えないようにしている。

山岳部をどんな形にしていきたいか

- 安全にクライマーを養成する場所。

「南極・サポートタイプ・山の形」の3講演に聴き入る

科学委員会 福岡孝昭

恒例となつた科学委員会主催のフォーラム「登山を楽しくする科学（VI）」が3月15日13～17時に東京の立正大学大崎校舎で行なわれた。会員外を含め約百数十名の出席者は熱心に3つの講演に耳を傾けた。出席者の評価は内容、会場なども含め、すべてについて好評であった。

日本の南極観測には多くの日本山岳会員が参加、その登山技術が大きな役割を担つてきたため、なじみが深いテーマでもあつた。

一つ目の講演は、南極に何度も



貴重なスライドを使って講演が進められた

二つ目の講演は、登山時の疲労対策として使用している方も多いと思われる「サポートタイプ」の効果について、聖マリアンナ医科大学の油井直子氏の講演。その効能について、比較実験結果を用いて説明。中高年、体力の十分でない女性登山者を対象に、疲労を減らすメリットが説明された。タイツの使用はサポートの使用より優

足を運ばれ、第53次の越冬隊長をされた国立極地研究所の石沢賢二氏により、南極探検の話から始まつた。1911～12年のノルウェー（アムンセン）とイギリス（スコット）による極点到達競争。そこに日本の白瀬隊による南極大陸到達が加わる。日本隊の南極観測は57年に「昭和基地」で開始された。これまでに過去72万年間の環境情報の缶詰である氷床コアが入手され、オゾンホールが発見され、多数の隕石が発見（月・火星起源を含む）されたことなどの成果について解説された。

三つ目の講演は、谷川岳の地形に、大雪山の山頂部は周氷河作用によつて形成されたことが解説された。『なるほど』と納得の説明であった。

谷川岳は氷河による浸食により鋭い谷地形に、大雪山の山頂部は周氷河作用によつて形成されたことが解説された。『なるほど』と納得の説明であった。

最後は地形学者小疇尚委員による「山の姿を読む—谷川岳と大雪山」の講演。

山頂部が尖った姿の谷川岳と、山頂部が高原状で緩やかな地形の火山起源の大雪山の地形がどのようにしてできたのかの説明。谷川



熱心に講演に聴き入る参加者

National Holiday

「山の日」を意義ある祝日に 未来を生むJACの今後の活動

永田弘太郎

「山の日」を8月11日と定め、国民の祝日とする法案が4月23日、衆議院の本会議で賛成多数で可決され、5月中には参議院でも可決されて成立する見通しとなつた。

日本山岳会など山岳5団体の制定運動がきっかけとなって国会議員たちが動き、超党派議員連盟が設立されてから1年。国民の祝日「山の日」が制定され、法律は平成28年から施行されることになる。運動開始から5年で得た成果である。

「海の日」が、成立に40年を要したことを考えれば、非常に短期間での実現であつた。当然、そこには理由があるようと思える。
なぜ山岳5団体が結束できたか、なぜ党派を超えて国會議員が結束できたか、なぜ「山の日」がいま必要とされたのか。

希有名日本の山を知つて欲しい

「山の日」制定協議会で作つたり

ーフレットのキャッチフレーズは

「山を考える」である。山について考える日を一日作ろうという思いで始まった。

日本は山の国である。国土の73・2%が100m以上の山地・丘陵地にあり、国土の68・55%が森林に覆われている。同時に日本列島とその山は、世界的に見てきわめて特異な存在である。

まず第一に「地形」。いまの日本列島は、2つの大陸プレートに2つの海洋プレートが沈み込むことで、大陸から切り離され、弧状に曲げられ、火山の影響などによって複雑で多様な地形地質を持つ列島および山が形成された。

第二に「気候」。春夏秋冬がある温帯気候に加え、亜寒帯と亜熱帯を持ち、夏は雨が多く冬は乾燥し、日本海側では偏西風の影響で世界でも希有な豪雪となる。

この雪と複雑な地形、南北に長い列島と島々のおかげで、氷河期の動植物が生き残るなど、生物多样性を実現してきた。

第三は「ひと」。日本列島に住む人々は、山を畏れ山から恵みを得て生きてきた。山を神体として崇め、信仰の場としてきた。山と共に暮らしお文化や歴史を培つてきた。

レジャーとしての登山人口の多さは世界でも群を抜いている。それは身近にある日本の山の素晴らしさでもある。季節の花々や紅葉、渓谷、滝、池塘、雪渓。温泉もあり、うまい水で作られた料理もある。

山から始まる未来

これまで日本人が山とうまく共生してきたかと言えば、そうとばかりも言えない。

飛鳥時代以降、森林の著しい伐採が行なわれ始め、幾度となく過剰利用と資源回復が繰り返されて、現在では有史以来最大の森林面積を得るには至っているものの、山崩れなどによる災害や野生動物の被害、さらには里山の過疎化など直面する課題も多い。

だが、地球温暖化抑制や生物多

様性など地球環境保全の役割が重視される一方で、近年、国産木材の需要も高まり、観光資源や遺伝資源、健康維持、あるいは地域再生の場としても、問題は多々ある

ものの、日本の将来につながるものとして注目されている。そして、自然共生の伝統的な知恵等々にも期待が集まる。

日本は少子高齢化と人口減の道を進んでいる(山岳団体もしかり)。加えて経済成長が行き詰まり、急速な情報化やグローバル化、あるいは都市化によって、生活基盤や精神身体基盤が不安定になつていてる。

山を考えることが、日本の未来を見出すという期待がある。「山

が持つ様々な資源や「山」と関わってきた価値観、あるいは多様性が、日本に安定した「生活」をもたらす可能性を持つている。

「山の日」を「山を考える日」にするのはこれからである。山を趣味として、研究の対象として、仕事として、居住の場として関わる、多彩な会員が在籍する当会が、それを率先してやる必要があるだろう。祝日としての「山の日」は、成立をもつて始まりとなる。



どこのへ行く『岳人』 モンベルに商標権譲渡

江本嘉伸

山岳雑誌『岳人』がことし9月号からモンベル傘下の雑誌に生まれ変わる、というニュースには驚いた。2006年『山と渓谷』誌がTやデザインを主力とするインプレスに売却された時もショックだったが、『岳人』の親会社は、盤石の中日新聞である。伝統ある山岳雑誌を簡単に手放すとは思いもしなかつた。それが突然の経営移譲、それもモンベルにである。

「中日新聞東京本社は2日、月刊登山専門誌『岳人』の発行を、9月号から登山用品メーカー「モンベル」（大阪市）の傘下の会社が引き継ぐと発表した。中日新聞は商標権も無償でモンベル側に譲渡する」（14年4月3日中日新聞）。

新聞報道に次いで当の『岳人』は、5月号の巻頭で「読者の皆様へ」と題する「東京新聞（中日新聞東京本社）による『岳人』発行業務終了のお知らせ」を掲載した。7月15発行の8月号をもって発行業務を停止する。9月号以降は辰野勇会長が社長をつとめるネイチャーエンター

プライズが引き継ぐとの内容だ。東京新聞の幹部と並んだ辰野は「山男シリーズ」で知られる版画家、畦地梅太郎の作品を手に写真におさまっている。新『岳人』の表紙は、当分のシリーズでいくようだ。

『岳人』の休刊は、昨年夏頃から話しあわれていたようだ。積年の赤字体質のほか何かの事情が生じたのだろう。山の世界でのこの雑誌の占める位置をあまり考える余裕もなく、切り捨てたのではないか。

ことし2月号巻末に編集長は「通巻800号へのバトンを何とかつなぐことができました」と、意味深に書き、こうつないでいる「岳人はもちろん同人誌ではなく、商業誌。伝統に則り登山の奥深さを伝えていくこと、近年のブームで広がった幅広い登山愛好者にも楽しんでもらえる内容であること——その狭間で揺れることが岳人の宿命だと痛感しています」

この時点では、どうに『岳人』の休刊は決まっている。「宿命」とは、リストラのことだつたのだ。

プライズが引き継ぐとの内容だ。東京新聞の幹部と並んだ辰野は「山男シリーズ」で知られる版画家、畦地梅太郎の作品を手に写真におさまっている。新『岳人』の表紙は、当分のシリーズでいくようだ。

『岳人』の休刊は、昨年夏頃から話しあわれていたようだ。積年の赤字体質のほか何かの事情が生じたのだろう。山の世界でのこの雑誌の占める位置をあまり考える余裕もなく、切り捨てたのではないか。

ことし2月号巻末に編集長は「通巻800号へのバトンを何とかつなぐことができました」と、意味深に書き、こうつないでいる「岳人はもちろん同人誌ではなく、商業誌。伝統に則り登山の奥深さを伝えていくこと、近年のブームで広がった幅広い登山愛好者にも楽しんでもらえる内容であること——その狭間で揺れることが岳人の宿命だと痛感しています」

『岳人』は1947年7月、京都大学学士山岳会有志によって創刊された。49年からは中日新聞社が発行する」となったのは、全日本をガバナーする月刊誌を抱えてイメージアップしたかった、ということがあつたと思われる。実際、その効果はあつた。儲からないが、一定の評価がある山岳雑誌を発行し続けたことは、中日新聞社と東京新聞の評価は、中日新聞社と東京新聞の評価を高めた、と私は見ていている。大部数、高視聴率だけがもてはやされると時代、赤字でもやる、という感覚は大いに応援したかったから。まさに『岳人』の創刊と同年同月に生まれた辰野はクライマーとして『岳人』を熱心に読みふけつた世代である。当時の『岳人』の巻末には毎号、谷川の衝立岩、北穂滝谷、剣北岳バットレスなどを舞台にした最新の登攀記録が掲載され、刺激となっていた。大学山岳部が先鋭的な活動をしていた時代で、『山と渓谷』はハイカー向けの雑誌、記録は『岳人』を見なければ、という風潮があった。

聞いていて感じたのは、『岳人』統への辰野氏の強い意志である。思ひきつて新しい山の雑誌を作りたいのだろう。しかし、現在進行形の連載は、いきなりすべてを切るわけにはいけない。これまでの『中日岳人』のコンテンツを活かしつつ、どうやつて『辰野岳人』に切り替えてゆくのか、時間をかけて見守りたい。

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとリポート
します。

北海道支部 オホーツク分水嶺350km 踏査完遂！



羅臼岳南西稜(分水嶺)の下降。真下に見えるのは知床峠

北海道支部が2007年から踏査を続けていたオホーツク・太平洋分水嶺350km。これをリレー式に繋いで2014年4月28日、ついに完全踏査に成功した。達成まで8年間を要した理由は、スタートした年の訓練山行で仲間

から発するオホーツク・太平洋分水嶺は、根室、釧路、オホーツク、十勝管内にまたがるが、そのエリアを手短に表現すると、東大雪の狭い山稜から池北原野のたおやかな森林帯、阿寒・摩周のうつそうとした原生林の丘陵、標津山地から斜里岳（1545m）の険しい山稜、そして根北峠から知床半島に入ると風と氷の世界となり、世界遺産の羅臼岳（1661m）を経て、地の涯・知床岬へと続いている魅力の溢れた山岳地帯である。

2011年に再開した踏査であるが、分水嶺上に登山路があるのはごく一部で冬の踏査が主体となるが、精力的に進めたことにより知床峠～羅臼岳～二ツ池間の8km

を雪崩で失うという不幸な事故により3年間自粛中断したこと、東日本大震災のため踏査実行を一時自重していたことによる。

大雪山・三国山（1541m）から発するオホーツク・太平洋分水嶺は、根室、釧路、オホーツク、十勝管内にまたがるが、そのエリアを手短に表現すると、東大雪の狭い山稜から池北原野のたおやかな森林帯、阿寒・摩周のうつそうとした原生林の丘陵、標津山地から斜里岳（1545m）の険しい山稜、そして根北峠から知床半島に入ると風と氷の世界となり、世界遺産の羅臼岳（1661m）を経て、地の涯・知床岬へと続いている魅力の溢れた山岳地帯である。

まず、4月24日に知床峠～羅臼岳にトライ。未踏でもあり非常に困難な羅臼岳南西岩稜を、強風のなか強行突破して踏査を果たした。

月後の今回の再トライとなつた。これを2ルートに分けて、本年3月の連休に完遂すべく多くの会員でトライしたが、異常に発達した低気圧の影響もあって敗退。1ヶ月後の今回も再トライとなつた。

まず、4月24日に知床峠～羅臼岳にトライ。未踏でもあり非常に困難な羅臼岳南西岩稜を、強風のなか強行突破して踏査を果たした。

続く二ツ池～羅臼岳間は4月28日の午前7時、曇天強風の羅臼岳に登頂して、オホーツク分水嶺踏査完成に成功した。これには支部長も参加してフィナーレを飾った。

積雪期にしかできない難易度の高い分水嶺踏査に関わったのは35隊、延べ168人に及んだ。正に



知床峠から羅臼岳に向かう

東京多摩支部、都岳連に加盟

(京極絢一)

支部総力をあげての闘いであつた。オホーツク分水嶺は知床岬に達して終わりではない。岬の先は千島列島へと繋がり、さらにカムチャツカへと続く。知床の自然はオホーツク海の影響を受けることからロシアの沿海地方やクリル諸島、カムチャツカの生態系とも深く関わり、この地域における自然保護についても学術的に調査研究を進めることで、分水嶺踏査に続く継続的な事業として動き始めている。

東京多摩支部は3月31日、日本山岳会に代わって東京都山岳連盟（都岳連）に加盟した。日本山岳会が都岳連を退会したいきさつは、会報『山』1月号で森会長が「日本山岳協会・東京都山岳連盟との新しい関係について」と題し説明されたとおりだが、支部会員が都岳連主催の技術講習会などに従来どおり参加できるようになることなどを考慮、本部が抜けたあと支部として加盟した。

これにより、都岳連加盟山岳団

体会員として、各種資格を得て都岳連の活動に参加していた会員をサポートすることになる。また日本山岳会の公益法人化に伴い、外部の登山関連組織との間で共通の課題解決に向けて連携を進めいく。長期的には文科省一日体協一日山協一都岳連と連なる山岳行政に関する情報を的確に把握していくと考えている。

(東京多摩支部、高橋重之)

北九州支部

太鼓を思いつ切り叩いて、かつぽ酒を堪能—宮崎ウェストン祭

平成25年11月2日、高千穂町五ヶ所高原の三秀台で16時30分より、第29回宮崎ウェストン祭が開催され、今回初めて参加させていただきました。三秀台からは祖母山が見えました。

ウェ斯顿祭は、日本近代登山の父であるウォルター・ウェ斯顿師をしのび、山岳遭難者に追悼の意を表し登山の安全を祈るということを知り、ウェ斯顿碑の鐘の音が胸に響きました。17時30分、別会場で交流会が開催され、カエデの葉が添えられたおにぎりや佃煮、

地鶏の炭火焼きなどが販売され、どれもおいしく、気づけば手が伸びていました。

小腹が満たされたころ、神事が始まり、主催者の方や来賓の方の挨拶の後、神楽が披露され、かつぽ酒が振る舞われました。かつぽ酒とは青竹筒に焼酎を入れ、たき火で燭をつけたもので、竹の油分が酒に浸み出して独特の風味になるという高千穂の名物酒。竹筒のおちよこをもらい、その中に熱々

のかつぽ酒が注がれ、良い香りがふわっと口の中に広がり、地鶏と一緒にいただきました。

かつぽ酒を堪能していると、今年の新婚さん夫婦によるキャンプファイヤーの点火式が行なわれ、赤く輝く炎の前で腕を組み、坊がつる賛歌を熱唱！ 体の芯から暖まりました。また、本陣太鼓鳴瀧会による力強い演奏では、飛び入り参加で太鼓を思いつ切り叩かせ

てもらつたり、大満足しました。その後、五ヶ所公民館で、(九州)5支部懇談会がありました。50人以上集まり、うどんや煮つけなどおいしいごはんが振る舞われ、各支部の紹介では、歌を歌つたり自己紹介があつたり、笑顔が絶えず盛り上りました。他支部の方たちと交流でき、うれしさはひとしおでした。

(伊藤友つ紀)

会費の預金口座振替ご利用のお願い

日本山岳会では、来年度(平成27年度)から、従来の郵便振替による会費納入制度に加えて会費の預金口座振替制度を導入することにいたしました。

預金口座振替制度の導入は、会員の皆様が金融機関の窓口まで出向いて振込を依頼しなくて済むこと、あるいは払い込みの失念により未納となってしまうことを防止できるなど、会員の皆様の利便性の向上と同時に、本部における会費収納関係事務の簡素化を目的としているものです。

従来どおり払い込み用紙でお支払いいただくこともできますが、皆様には、ぜひともご理解の上、来年度(平成27年度)以降、預金口座振替制度をご利用いただきたく、本年5月下旬に「預金口座振替依頼書」をお送りいたします。

なお、本年度(平成26年度)分の年会費については、先にお送りしました郵便振替用紙により納付していただきますので、よろしくお願ひ申し上げます。

記

<預金口座振替について>

1. 概要

(1) ご利用いただける金融機関

都市銀行、地方銀行、第二地方銀行、信託銀行、長期信用銀行、信用金庫、労働金庫、農業協同組合(一部を除く)、信用組合(一部を除く)、ゆうちょ銀行

(2) 預金通帳等への印字 「DF. JACネンカイヒ」と表示されます。

(3) 振替日 来年(平成27年)以降、毎年4月27日(金融機関が休日の場合は翌日)です。

(4) 集金委託先 「三菱UFJファクター株式会社」(三菱東京UFJ銀行関連会社)に委託します。

2. お手続きの方法

(1) お送りした「預金口座振替依頼書」の指定口座欄へ預金者名、金融機関名、支店名、店番号、預金種目、口座番号のご記入と、金融機関お届印(捺印とも)のご捺印をお願いします。

(2) 3枚目は控えとして保存していただき、1枚目と2枚目を、同封の封筒によりご返送下さい(お手元の預金通帳等と照合の上、正しくご記入ください。)。

(3) 申込の締切期限はありませんが、取りまとめの都合上、第1回のお申し込みは、本年(平成26年)7月末までにお願いいたします。

3. その他

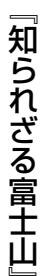
ご不明の点は本部事務局(03-3261-4433)までお問い合わせ下さい。



2013年12月発行
山川出版社刊
A4判 207頁
定価1600円+税



2014年1月発行
山と溪谷刊
四六判 256頁
定価1200円+税



2013年7月発行
岩波書店刊
新書判 222頁
定価900円+税

『レンズが撮られた幕末明治の富士山』
小沢健志・高橋則英・監修

富士山って一体何なのだろう。
確かに一つの山には違いないが、
「山」と言い切れないのが富士山で
ある。考えてみれば、「山」という
範囲に収まらないのが富士山な
である。あえていえば「富士山」と
いうジャンルに属す、日本を象徴
する「概念」である。

富士山が世界文化遺産に登録さ
れてから、数多くの書籍が書店に
並んだ。ただの「山」ではない富士
山は登山、スポーツ、写真撮影など
趣味の世界だけでなく、地理学、地
質学、生物学、地球物理学などの自
然科学、さらには歴史学、民俗学、
文学、美術と、ありとあらゆる興味
の対象になるからである。

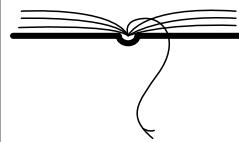
そんななかに、読んでおもしろ
いと思った本が3冊ある。

まずは小山真人氏が書いた『富
士山－大自然への道案内』(岩波
書店)。

静岡大学で火山学を研究してい
ます。



図書紹介



る著者が、様々なコースを巡りながら
火山としての富士山を分かりやす
く解き明かしていく。富士山やその
周辺に残る火口列、溶岩流・火碎
流・泥流・山体崩壊の痕跡。それら
をガイドしながら、これまで一般には
あまり知られていなかつた、生きてい
る火山としての富士山の魅力に読む
者を誘う。特に何度も大きな山体
崩壊を起こしながらも、嘗々と溶岩
や火山灰を積み上げてきて、今の美
しい形を作り上げているという話は
感動的でさえある。

ただ麓から登つて頂上に達するだ
けで、ほとんど寄り道などしたことが
ない評者は、人波にあふれ、木も草
もほとんどない富士山は登山の対象
として評価してこなかつた。しかし本
書を読んで宝永山、富士グランドキ
ヤニオン、山腹に点在する火口列な
ど、本書で紹介された火山の痕跡を
探索するため富士山を登りたく
なつてしまつたことを白状しよう。

もう一つは当会会員の上村信太
郎氏の力作、「知られざる富士山」
(山と溪谷社)。

富士山に関する蓄積が148。
次から次と、ページの中から現われて
きて、読む者を富士山ワールドに巻
き込んでいく。ジャンルは自然・伝説、
違う。

歴史、民俗、人など、人文を中心と
ても幅広い。これだけいろいろな分野
のことをよく調べたと感服せざる
を得ない。これも富士山に対する著
者の深い愛情の賜物といえよう。
そして日本写真協会名誉顧問の
小沢健志氏と日大芸術学部で写真
史の教鞭をとる高橋則英氏の監修
による『レンズが撮られた幕末明
治の富士山』(山川出版社)。

本書はペアト、スタイルフリード、
下田部金兵衛、小川一真など幕末明
治に活躍した写真家たちの作品
を通じて、古きよき時代の富士山
とその周辺に息づく人々の姿や雰
囲気を見事に蘇らせている。さら
に写真とそれを撮影した人々や、
富士山における気象観測の歴史、
幕末の外国人の富士登山について
の適切な解説がうまくそれを引き
立てているように思う。

『知られざる富士山』の最後の章
にあるが、深田久弥は『富士山』と
いう本を編むために文献を漁つて、
それが後から出てくるのにサジを投げた」という。そんな富士
山に関する書籍だが、ここにあげ
た3冊は、知識欲を気持ちよく刺
激してくれるという意味でひと味

『劍沢幻視行 山恋いの記』

和田城志・著



2014年3月発行
東京新聞刊
A5判 368^枚
定価1700円+税

お金があれは利境と言われる地域へ、優秀なガイドを雇えば困難と言われるルートに行くことがで
きる昨今、40年にわたって色褪せない思いを持ち続け、自分のスタイルを崩さず、流れず、ひたすら山と向き合ってきた著者のこだわりを染しめる一冊である。

青春と鬱屈の日々をノスタルジックに語り、昔の山行を懐かしむような軟弱な本ではない。よい山行とは、ビル山かそうでない山と言いつつも著者の山行歴がテンコ盛りになつて鬼気迫つてくる。所々に挿入されてるボエムやさりげないスケッチが緊迫感を和らげてくれるもののしつこさと乾いたものが混ざつてゐる憧憬、恋慕、独白は、登山の遠く高く難しくの構成要素に、心

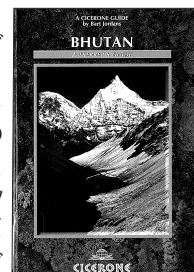
最初は読みづらいストーリーに苛立つかも知れないが、にじみ出

る著者の灰汁に浸りだすと、自然を遊び尽くそうとするハードな登山に安心感を得られるようになる。先を読んで緻密に組み立てられる頭の遊びでなく、駆り立てられた心と引きずられる脚によって作られる大きな底辺の上の出来事が、次第に読者の肩を解かしてくれる。滑落事故で山を諦観したときの行き場のない生活臭さは、ジメジメと後を引かず、また山の出来事に吸収されていく。陽炎の揺らめきのような著者の行動変化は、先々の予測がつかない。巻末に最近の行動足跡が載っているが、2012年の約半分の日々は、家を離れて心の向くまま自然に溶け込んでいるようだ。

私は、若かつたころに著者とロープを結んで登っていたことがある。氣恥ずかしさの^{ためら}所以か、記録を公表されることを躊躇^{ためら}っていたのに、心情をまとめて吐き出し、この本を上梓されたことを不思議にさえ思う。まだ語り尽くしていない多くのことを持たれているはずで、次のステージへの展開を楽しみに思う。

ストレートな文章の心地よさを感じる書籍である。　(片岡泰彦)

Bart Jordans • 楠
『BHUTAN—A Trekker's
Guide』



2008年発行
Cicerone刊
B6判 336頁
£17.95

が50000mを超す峠に囲まれた地域である。ルナナに至るルートも3コース取り上げられている。

ブーランのトレッキングは、急激に高度を上げるルートが多く、特に中央部からルナナに至るルートでは、出発して2～3日目に4500mの峠を越えるものもあり、それだけに高山病に対する備えが必要であろう。またネパールと違い、トレッキングのインフラが未整備で1週間以上集落がないルートも多く、茶屋、宿泊施設もない。

著者は、好きなルートとしてルナナとブナカをダイレクトに結ぶゴンジュ・ラ越えのルートをあげている。私も85年秋、サイクロン襲来後の大雪のなか、越えたことがあつたが現地住民の非協力で、遠征物資を捨てざるを得ない逃避行であつた。

のルートが11コース、北西部から中央部にいたるロングトレックが1コース、ガンケル・パンズム南側の中央部が10コース、インド平原に続く南部が1コースの計27コースが紹介されている。それぞれ、容易なものから相当厳しいものまで、所要日数も2日間の短いものから、西部から中央部に至る24日間のルートまで多彩である。西部のパロから中央部のブムタンに至る2ルートを合わせれば、32日から35日間にもなる。ブータン・ヒマラヤの珠玉は、なんといってもルナナである。北側をヒマラヤ主脈、東・西・南

う。北側をヒマラヤ主脈、東西・南北を含む。3日から3日間

Climbing&Medicine · 62

マダニが媒介する新たな感染症の発生

秦 和寿

マダニによる新たな感染症が出現した。登山者にとって厄介なことが一つ増えたことになるが、古くて新しい問題である。江戸時代の古典籍、『倭漢三才図会』(寺島良安、1712年)には壁虱(ダニ)、太仁と記され、添付の図は虫体の脚部が8本と正確だ。スウェーデンのリンネの分類学は1750年以降なので、その40~50年前の日本では、すでに正確な形態を認識していたことになる。さらに古く『和妙抄』(931年)などには八脚子などの記述もあり、樵などはゆっくり引っ張り取る伝統的な除去法を熟知していた。

重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の発生

平成25年の1月に厚生労働省が重症熱性血小板減少症候群(SFTS)の症例を発表してから11月までに47例の発生があり、そのうち19名の死者が確認されている。死亡率は40%で、震撼するような数値である。ウィルス保有のマダニが人体に寄生し感染するもので、媒介種はタカサゴキララマダニで、ほかにフタトゲチマダニなど4種もこのウィルスの遺伝子が検出されている。今のところ発生地域は西日本の兵庫以西の13県(鹿児島5例、熊本4、宮崎5、長崎4、佐賀2、愛媛8、高知3、徳島2、山口4、広島5、島根1、岡山2、兵庫2)に限られ、東日本からは発生していない。この疾病を予防する最も良い方法は、マダニに寄生されることである。ところが登山者は藪漕ぎなどで笹藪を縦断することが

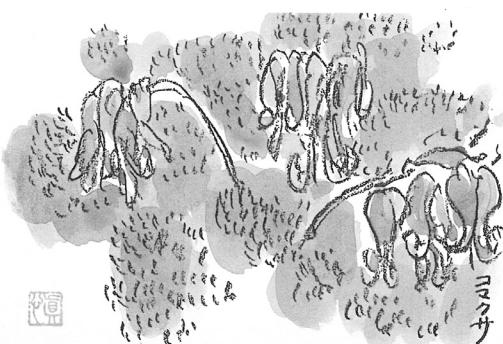
常であり、哺乳動物が生息する山間部で寄生されている。この疾病的年齢が、判明している42例のうち60歳以上が85%を占めていて、このことは高齢化する山岳会にも無視できない状況といえよう。高齢者は免疫力が落ちることと関連があるかもしれない。

マダニの除去

山地でのマダニの予防法は次のとおり。人工繊維製の長袖長ズボン、さらにスパッツの着用で皮膚を保護すること。藪などに入ったあとは、着衣を点検しマダニの有無の点検も大切なことだ。風呂に入ってもマダニは気泡つけ呼吸するので取れない。人体についてもすぐ吸血するわけではなく、皮膚の柔らかい部位などを探し回っている。無理やり引っ張ると口器(口下片)が皮膚に残り、時に結節様の反応を示すことになる。皮膚のマダニを除去するには消毒用アルコール(70%エタノール)やワセリンを十分に塗布し、呼吸器の気門をふさぎ窒息させ、皮膚から離れるよう促し、ゆっくり取り除くことだ。エタノールは、このウィルスに対し殺菌作用が知られており有効。皮膚に発疹や紅斑などの皮膚反応や発熱があった場合は、受診することが大切である。



添付図 マダニの形態 脚部8本 倭漢三才図会(1712)





平成26年度第1回(4月度)理事会

議事録

日時・平成26年4月9日(水)19時~

20時40分

場所・日本山岳会集会室

出席者・森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山田各理事、吉永監事

【欠席者】山賀理事・浜崎監事
議事に先立ち、森会長より、「公益法人運営について、法令順守を順次徹底していくので協力願いたい」との、年度初めの挨拶があつた。

【審議事項】

1・会費納入に係わる制度変更および定款施行細則変更案の総会上程について(吉川)

年度途中の入会者の年会費の割

引制度導入に関し、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討

された。

〈承認〉

平成27年4月から会費の銀行口座引き落とし制度を導入することおよび複数業者を比較検討の上、三菱UFJファクターを採用することについて、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。〈承認〉

2・秋田支部長の交代について
秋田支部から支部長交代の答申が以下のとおりあり審議された。
現支部長・佐々木民秀(5748)→新支部長候補者・今野昌雄(9492)
〈承認〉

秋田支部から支部長交代の答申が以下のとおりあり審議された。

44人の入会希望について別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。

【報告事項】

1・寄付金・助成金受入れ事前申請および受入れについて、14件の事前申請、21件の受入れがあつた。

〈吉川〉

3・110周年記念事業における旅行業者選定方法について(森)

原

「業者選定作業小委員会」を設置しました。3月28日、第1回の当委員会を開催し、選定方法等の一定のルールを検討した。その内容について、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討され

明し、詳細に検討された。〈承認〉

4・会報「山」および機関誌「山岳」編集業務委嘱について(節田)

平成26年度の編集業務委嘱にについて、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討された。〈承認〉

5・委員会規程改正について(高

原)

各委員会の業務を別表で明記す

ることについて、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討さ

れた。

〈承認〉

6・入会希望者について(高原)

44人の入会希望について別添資

料により担当理事が説明し、詳細に検討された。

〈承認〉

7・平成25年度事業報告書・決算に

関する、内閣府提出までのスケ

ジュールについて説明があつた。

6・春山(4月25日~5月9日)天

気予報を前年同様に提供する。

(古野)

8・「山の日」制定の動きについて

プロジェクトチームから報告があつた。(森)

9・今年度予想される内閣府立入

検査対応について、法令に沿つた

理事会運営等の重要性について説明があつた。(吉川)

10・第16回(平成26年度)秩父宮記念山岳賞推薦募集について、会報

「山」4月号およびホームページに掲載する。(黒川)

11・今年度の日中韓三国学生交流登山について(古野)

8月6日より12日まで韓国で実

施される。参加希望の大学生を募

集し、10~15人程度派遣する。

12・会報「山」4月号の発行について報告があつた。(節田)

【連絡事項】

1・会費納入に係わる制度変更および定款施行細則変更案の総会上程について(吉川)

年度途中の入会者の年会費の割

引制度導入に関し、別添資料により担当理事が説明し、詳細に検討

5・神戸大学大学院人文学研究科より当会発行パンフの転載許可申請があり許可された。(高原)

ルーム日誌
今月4月

1日 図書委員会 スケツチクラブ

- 1・今夏の富士山における開山期間等について（静岡県）

2・「昭和洋画壇のきらめき」開催（4月5日～6月15日）（河口湖美術館）

3・国立登山研修所平成26年度事業計画（安全登山普及等研修会／6月27日～29日）ほか）（独立行政法人日本スポーツ振興センター）

4・谷川岳危険地区の登山禁止について（群馬県）

5・「知床半島先端部地区へ立入る方へ」の案内（公益財団法人知床財団）

6・「信州山の日」制定骨子の公表について（長野県知事）

7・「今後の予定」

 - 1・理事会 5月14日、6月11日、常務理事会 5月7日、6月4日
 - 2・評議員懇談会 5月13日(火)
 - 3・監事監査 5月14日(水)
 - 4・総会 6月21日(土)
 - 5・内閣府へ平成25年度事業報告書、決算書提出 6月27日
 - 6・山岳4団体懇談会 7月16日(水)

3日	常務理事会	集会委員会	YOUTH CLUB	24日	麗山会	自然保護委員会
4日	110周年記念事業実行PT 公益法人運営委員会 ゆき わり会	高尾の森づくり の会	YOUTH CLUB	25日	家族登山普及WG	高尾の森づくりの会
7日	総務委員会 高尾の森づくり の会	高尾の森づくり の会	YOUTH CLUB	26日	公益法人運営委員会	高尾の森づくりの会
8日	集会委員会 山岳研究所運 営委員会 YOUTH CLUB	九五会	YOUTH CLUB	30日	YOUTH CLUB	4月来室者 466名
9日	理事会 山想俱楽部 休山会	本間児二(4615)	物故	25日	学生部	4月来室者 466名
10日	フォトビデオクラブ 山岳 地理クラブ 学生部	村上 力(4648)	本間児二(4615)	26日	公益法人運営委員会	高尾の森づくりの会
11日	スケッチクラブ 山の自然 学研究会	原田之幹(4869)	村上 力(4648)	30日	YOUTH CLUB	4月来室者 466名
14日	スキークラブ 高尾の森づく りの会	松井芳隆(5201)	原田之幹(4869)	25日	家庭登山普及WG	高尾の森づくりの会
15日	三水会 青年部 つとも会 二火会 科学委員会 みち のり山の会	中島信一(7673)	松井芳隆(5201)	26日	公益法人運営委員会	高尾の森づくりの会
16日	海外委員会	藤井正昭(9263)	中島信一(7673)	30日	YOUTH CLUB	4月来室者 466名
17日	110周年記念事業実行PT 務委員会 資料映像委員 会 遭難対策委員会	後藤邦慶(9766)	藤井正昭(9263)	25日	家庭登山普及WG	高尾の森づくりの会
18日	英文ジャーナル委員会 デジ タルメディア委員会 支部活 性化PT 山遊会 スキー クラブ	退会	後藤邦慶(9766)	26日	公益法人運営委員会	高尾の森づくりの会
21日	T	加賀 勝(6999) 青森 茅野忠幸(9905)	本間児二(4615)	30日	YOUTH CLUB	4月来室者 466名
22日	松岡榮治(14560) 熊本 松岡啓子(14561) 熊本 故長井美照(15153)	杉本秋之介(7886) 関西 松岡繁(8553) 福森利明(9683) 宮崎 蓮谷義雄(9905) 中村忠紀(13524) 北九州 高橋耕志(12530) 東九州 森田真奈佳(14204)	村上 力(4648)	25日	家庭登山普及WG	高尾の森づくりの会

図書受入報告(2014年4月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
北区飛鳥山博物館(編)	岳人冠松次郎と学芸官中田俊造:戦前期における文部省山岳映画	78p/30cm	北区飛鳥山博物館	2014	発行者寄贈
佐伯邦夫(編)	剣岳地名大辞典(立山カルデラ研究紀要2013別刷)	35p/30cm	佐伯邦夫(私家版)	2012	著者寄贈
ひがしかわ観光協会(編)	大雪山から育まれる文献書誌集	52p/30cm	ひがしかわ観光協会	2014	高澤光雄氏寄贈
リヒトホーフェン(著)上村直己(訳)	リヒトホーフェン日本滞在記:ドイツ人地理学者の観た幕末明治	246p/22cm	九州大学出版会	2014	出版社寄贈
不來方峻	山岳歌集ヴァンデルング組曲	183p/19cm	本阿弥書店	2014	著者寄贈
日本山岳会四国支部(監修)	四国の山歩きベスト50:山を歩いて元気になろう	151p/21cm	徳島新聞社	2014	監修者寄贈
ウェストン(著)山本秀峰(訳)	宣教師ウェ斯顿の観た日本	232p/22cm	露蘭堂	2014	出版社寄贈
広島山稜会(編)	峠No.50:広島山稜会会報発刊50号を迎えて	143p/30cm	広島山稜会	2014	発行者寄贈
玲峰グループ(編)	玲峰(Vol.83):玲峰グループ創立60周年記念号	133p/30cm	玲峰グループ	2014	発行者寄贈

日本山岳会所蔵資料紹介 No.11

[資産番号] 00133

[資料名] 各国山岳会より松方隊長宛のメッセージ

[部門名] 書簡

[寄贈者] 日本山岳会

[受入日] 1970年



①英国山岳会



②ジョン・ハント

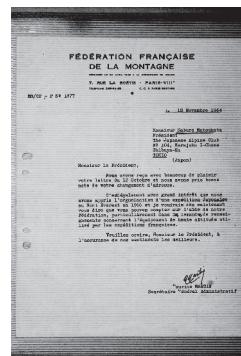
松方三郎(1899～1973年、第五代・第十代会長)宛の各国よりのメッセージ18通が残されている。

日本山岳会はマナスル登頂以後、次の大きな挑戦としてエベレスト登山計画を企てた。1966年にネパール政府より念願の登山許可を得たものの、急に許可が取り消しとなり、足踏みを余儀なくされた。当時のネパールは政情不安が続いており、1969年まで外国人による登山は禁止となり、その後、登山許可は1年に1回しか得ることができなかった。登頂をねらう各国登山隊も多く、エベレスト登山を実現するにはそれなりの幅広い力が必要であった。英國山岳会やスイス山岳会の会員でもあった松方は、有力各国に我が国のエベレスト登山に対する熱い思いの「挨拶状」を送り届けた。それを受けた国や団体などから届いたメッセージである。

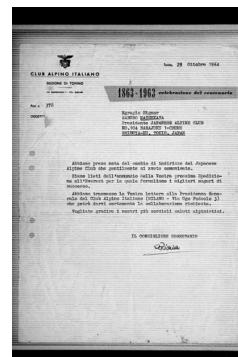
これは、日本山岳会エベレスト登山隊登頂(1970年5月11日)における実現環境作りとして貢献した重要な書簡であろう。その一部を紹介する。

松方が「挨拶状」をどこに送ったのか、その内容はいかなるものであったか……残念なことに詳細な記録は見つかっていない。情報をお持ちの方は下記までお知らせください。なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会へアクセスすると、「会報ページそのもの」を「拡大およびカラー」で見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。

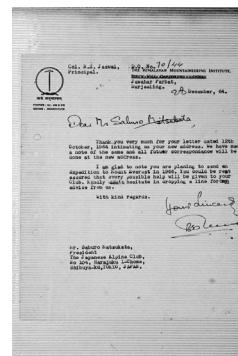
✉jacshiryo102@jac.or.jp
(資料映像委員会)



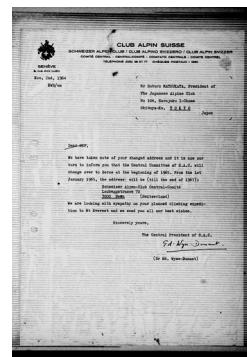
⑤フランス山岳連盟



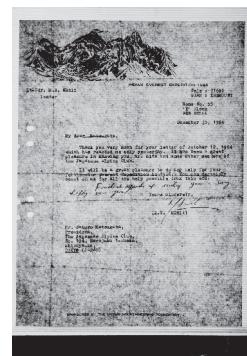
③イタリア山岳会



④スイス山岳会



⑥ヒマラヤ登山学校



⑦インド・エベレスト登山隊長

編集後記

● ページを割いて大学山岳部のアンケート結果を載せたのは、各山岳部やOB会が、少しでも勇気づけられ、次なる方向性を見出し、横の繋がりができればよいと思つたら。休部になつたけれど、その後復活した大学もある。部員が増加し、活発に活動している部もある。少數ながら本当に登山に打ち込みたい部員が揃い、続いている部もある。

● 登山は大きなリスクを含んだ行為であるが、それを承知した先輩やOBたちに支えられながら、若い時期にみつちりと経験できることがどれほど貴重なことか、振り返ると実感する。山岳部に限らず、WV部、探検部など自然のなかへ入つて活動する部が、活発な時代であつて欲しい。(柏 澄子)

日本山岳会会報 山 828号

2014年(平成26年)5月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会长 森武昭
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印 刷 株式会社 双陽社